説教20210912イザヤ50：4-9　マルコ8：27-38

「福音を語ろう」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

人の口に戸はたてられない、とよく言われます。世間の噂話はどうやっても止めることができないことを言い表した慣用句でありますが、私たちは今までにこのことを身につまされて体験したことが数多くあることでしょう。あるときは、受動的に、自分に関するうわさが広まっていってうれしいな、あるいはいやだな、と思わされたり、またある時は主体的に、あるうわさを方々に告げ知らせたこともおありになることでしょう。

今ほど、「うれしいな、あるいはいやだな」と思わされると申しましたが、前者はよい噂、後者は悪い噂にまつわることです。そしてこの世の中においては、「人の不幸は蜜の味」とも言われるように、ついつい後者の悪い噂のほうが優ってしまって、それが蔓延しますと遂にはとりかえしのつかない不幸な出来事が起こってしまうこともまれではありません。

　さて、今日の説教題は「福音を語ろう」と致しましたが、これはより聖書に即して言い換えれば、「福音を宣べ伝えなさい」となります。言うまでもなく、福音書の最後でイエス様が私たちに与えられた福音宣教命令であります。イエス様がこの福音宣教命令を私たちに下さっていることは大変重要なことで、この業が私たち人間によってなされない限り、御国はやってこないということです。「福音を宣べ伝えなさい」という業は、今はこの地上を離れて天におられる、イエス様が今の自分にはできないことを、私たち人間に託された重要な任務なのであります。

とはいえ、その命令を常に意識して肩ひじ張って、隣人に福音を語っても、相手がかえって警戒して、話を聞いてもらえない、引いてしまうということも多々あります。そこで今日は「福音を語ろう」ということで、ちょっと肩の力を抜いて福音を宣べ伝えるということを語ってみたいと思います。

　さて、福音も噂話の様にどんどん周りの人に伝わっていけば如何でしょうか。そんなよいことはないですね。ところが実のところ今の日本では福音が、噂話のように、人の口に戸はたてられないと慨嘆する程には、まったく広まっていかないのが実情でしょう。ご家庭にあっても、次の世代の人たちになかなか信仰が継承されないという話がよく聞かれます。

　でも、福音が噂話のように隣人に伝わっていけば、こんなにうれしいことはないですね。いやいやそんなことはありえないだろう、と言われるかもしれませんが、歴史的にそうゆうことが起こった時期がありました。幕末に、長崎の浦上村うらかみに住むキリシタンの末裔たちが、大挙して信仰を告白し、何千もの人たちが各地に流罪になった事件がありました。この事件は有名ですが、実は、このように人々がイエス様の十字架を慕い、そのあとを追いたいという心情は、浦上村だけにとどまることではありませんでした。それは全国に噂として流れ、人々を突き動かすだけの力を秘めていました。実際、あの坂本龍馬は、長崎におもむき、浦上村の信徒たちの信仰や行いを目の当たりにしたとき、「よし、キリストを利用して全国の民衆の人心を扇動し、討幕を図っていこう」と、思った程でした。それくらい、その時の人々は十字架のキリストにひきつけられる心情を持ち合わせていたのでありましょう。ですから、その様な心情は、噂話として、瞬く間に広がっていく力を持っているのです。

　ちょっと話が逸れましたが、福音も噂話の様に周りの人に伝えていくには、私たちが、心底、イエス様の御言葉を味わい、それを蜜のように毎日味わっていることが大切であります。

　今、別府不老町教会では教会こよみに基づいて聖書箇所を選んでいます。今日、この杵築教会に来させていただきましたが、今日も教会こよみに基づく聖書箇所です。それで今日の聖書箇所には毎日口ずさんでも味わいつくせないほど味わい御言葉が沢山みられます。ちょうどマルコ福音書も中ほどに差し掛かり、イエス様は、弟子たちに最も大切なことを伝える時を迎えていたのです。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる。」

この御言葉はもう暗記するほどに何べんも何べんも味わっておられる方もいると思います。この御言葉の味わい、それは、私たちがこの世の中にあって、時にはこの世の誘惑に負けて、罪に陥っても、又、この御言葉を口ずさみ、味わえば、又、イエス様に立ち返ることが許されるという力をもっています。

私たちは福音の為に、背中を撃たれ、頬を撃たれ、あざけりと唾を投げつけられたことが幾度あったことでしょう。しかし、そのたびに、イエス様は私たちを救ってくださり、ますます、私たちはイエス様のまじかに憩い導かれるものとなりました。幼い子供の頃には分かりませんでしたが、私たちは、キリストの為にそして隣人の為に、自分の人生を用いるほうが、よほど幸せであり、その人生は味わい深くなることでしょう。

　さて、今日のマルコ福音書の聖書箇所で、イエス様は不思議なことを言っておられます。30節「するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。」

「自分のことは誰にも話さないように」なぜ、イエス様は弟子たちにこのように口止めをされたのでしょうか。実は、イエスさまが口止めをされたのはこれが初めてではありません。ちょっと前の7章36節でもイエス様は人々に口止めをされています。それはなぜかと言いますと、イエス様は福音書の半ばに差し掛かって、ご自分が遂に十字架にかけられるのだということを、周りの状況からよみ取り、もはや確信していたからです。ファリサイ派や律法学者たちの策謀は広まり明確になっていました。そんな中で、弟子が「あなたはメシアです」と言い表したり、人々がイエス様のなす奇跡に狂喜乱舞する有様は、イエス様には、喜びの絶頂の次に来る、人々の怒りや憎悪の姿を予感させる、悲しい姿に見えたことでしょう。

　つまり、この時の弟子たちや人々は未だ、イエス様の御言葉を味わうことができなかったのであります。ペトロは、十字架の死を語るイエス様に向かって、そんなことはあってはならないといさめ始めました。この時のペトロや他の弟子たちは、あくまで、この地上でイエス様が王となり、自分たちを引き上げてくれて、そうしてこの地上にまことの平和の王国が実現するということを思い描いていたことでしょう。このようなことを行ってくれるメシアを、ペトロたちはイエス様に期待していたのです。確かに、イエス様は十字架で死んだ後に、三日の後に復活することになっていると、はっきりと明言をされていますが、そんなことはペトロの耳には入らなかったのです。

　イエス様の話を聞いたペトロは、イエス様が十字架で死ぬということは信じられても、三日後に復活するということは信じられなかったのです。だからペトロはそんなことはないといってイエス様をいさめたのです。

このことを、今日の初めから語っています、味わうということに関連つけてみますと、このように言えるのではないでしょうか。ペトロはこのとき、十字架上でイエス様が死ぬ苦しみを味わうことはできても、復活する喜びは味わうことができなかったということです。この時のペトロたちにしてみれば、時代的にどうしようもないことですが、復活する喜びを味わえない、ということは大変痛いことではないでしょうか。

　エジプトを脱出したイスラエルの民は神に向かってこう嘆きの叫びを挙げます。「エジプトではネギやニンニク、肉や野菜を食べていた。私はその味が忘れられない、それに引き換え、この荒れ野ではマナばかりで、他には何もない」と民たちは神に言いました。マナという神からの日々の恵み、それによって民たちは荒れ野での日々を養われ生きていくことができたのです。そのマナがどうな味だったのかは分かりませんが、民たちはこの時マナを、とても味気ないものとして、神に不平をかこったのであります。

　味覚というのは不思議なもので、三日三晩食うや食わずの後に、きゅうり一本を丸かじりして食べれば、こんなに美味しいものはないでしょう。又、俗に「食い物の恨みは恐ろしい」とも申しますが、これも食べ物の味わいが人の心に残す印象の深さを言い表しているのでしょう。

このマナを味わうことができなかった荒れ野でのイスラエルの民たちの姿は、御言葉を味わうことができなかった、この時のペトロの姿に似ています。もちろん、ペトロも、今日のイエス様の御言葉を頂いて聞いてはいますが、それを味わってはいないのです。これまでもペトロは、イエス様に従いイエス様の御言葉によって生かされて来たのではあるけれども、その御言葉の価値に気づいていないし、それを味わうことも出来ないのです。何か御言葉を味気ないものとして受け取っていたのではないでしょうか。　それでも、ペトロたちが十字架のまじかまで、イエス様にしたがっていくことが出来たのは、そこに生身のイエス様がおられたからに他なりません。

　さて、今の私たちについて語りましょう。私たちは、復活したイエス様から福音を宣べ伝えなさい」という福音宣教命令を受けています。ですから私たちはこころおきなく隣人に福音を語っていこうではありませんか。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」というイエス様の御言葉を語る私たちは、イエス様が十字架上で命を失われた後、三日後によみがえられたということを知っています。そして、イエス様は今は天上におられ、私たちの為に執り成しの祈りをしていてくださいます。私たちは、この地上で十字架を背負う歩みを、イエス様と共に進める時、「背中を撃たれ、頬を撃たれ、あざけりと唾を投げつけられる」ことがしょっちゅう起こることでしょう。しかし私たちがこれらの痛みを味わう時、そこに、復活の喜びの味わいがそこはかとなく満ち溢れてまいります。このことは、私たちの言葉だけでいいあらわせることではありません。私たちは聖餐を受けて生身のイエス様を頂き、御言葉の通りに生活をしていくことで、その喜びの味わいに満たされるようになります。私たちがこの味わい深いキリストの生活を最後まで続けていくことが出来ますように、そしてその味わい深い福音を、隣人に語ってまいりましょう。